調査ノート　石狩市浜益区「黄金山」とはどのような山か

General survey：What kind of mountain is "Koganeyama"
in Hamamasu-ward，Ishikari City?

石橋　孝夫 *
Takao ISHIBASHI*

キーワード：黄金山，アイヌ民族

はじめに

石狩市浜益区の「黄金山」は同区の象徴的山で，古くはこの地のアイヌの人々が神々の住む山として儀式の際に祭壇に祀ったといわれている．その後，この地のランドマークとして，ここを通る人々の日誌や絵図に記録され広く知られる山となった．

昨年，筆者は浜益区の「チャシ」に関する考古学的調査をおこなった際，関連でこの「黄金山」に関する文献などを調査する機会に恵まれた．本稿は，その調査にともなって筆者が目にした黄金山に関する文献について取り上げ紹介し，この山が人々にどのように認識されてきたかについて考えてみたい．

1．黄金山の位置と景観

図 1 に石狩市浜益区と黄金山の位置を示した．また図 2 に黄金山，摺鉢山，岡島，毘砂別川などの位置を示した．なおこの図のベースは明治 30 年の陸地測量部の地図「茂生」(北海道廳 1887) を使用し，その上に関連する地名を加筆した．黄金山は浜益平野の北東奥にある独立峰で標高 739．1 mである , 摺鉢山は標高 169 mである．第 3 図に浜益平野上空の西から東方向に 撮影したドローン画像を掲載した．山の名称は左から黄金山，丸山，摺鉢山である．

なお，この画像は浜益区の「チャシ」調査に協力いただいた高橋俊彦氏から提供された画像で，撮影日は 2023 年 4 月 17 日である．図 4 は安政元 (1854) 年に描かれた「蝦夷廻浦図絵」の一部で中央に黄金山．その前に現在の丸山と摺鉢山が描かれている．黄金山の図は良くみるが，江戸時代の図にこれ以外の丸山，摺鉢山の姿が描かれているのは珍しい．

図 5 は東側からみた摺鉢山を東側から撮影した画像で遠くに石狩湾がみえる．図 6 は船上から見えた黄金山の姿で，船と山の距離離は約 32㎞である．このように黄金山はかなり遠くからでもその特徴的な姿が視認できる．また，この山はそばにある丸山とともに船の航行や網入れ目標となっていたとも聞く．

黄金山は 2009 年，国の名勝ピリカノカのひとつとして指定された．指定理由は「黄金山 (ピンネタイオルシペ) は標高 739.1 mのピラミッド状

* いしかり砂丘の風資料館 (学芸協力員)　〒 061-3372　北海道石狩市弁天町 30-4

の美しい山で，その呼称は「樹叢 (じゅそう) の平原の中に聳える雄山」を意味する．この山を中心とする一帯は，ユカラに少年英雄として登場するポイヤウンペの拠点としての伝承を育み，この地のアイヌの人々を長く守護し続けた．(解説文抜粋)」(月刊文化財，2009：15) となっており．ユーカラとの関連が強く指摘されている．ここでいう「拠点」とは「チャシ」のある場所の意味と思われる．

宇田川洋 (宇田川，2000：6，82-84) によるとチャシは 16 ～ 18 世紀の所産といわれている．しかし，黄金山は浜益アイヌの「チノミシリ (我々が祈る山)」だったとみられる．そのためポ イヤウンペの拠点と思われるようになったのは，ユーカラが成立した後のことと筆者は考えている．
黄金山の存在はユーカラとともに浜益以外のアイヌの人々に，その存在が古くから知られていたようである．久保寺逸彦は『アイヌ民族誌下』(久保寺，1969：755) のなかで「胆振・日高のアイヌの故老は，ユーカラの発祥地を日本海岸浜益の地と伝えている」と述べており，そのことが窺われる．このように他地域にも浜益のユーカラが広まったのは，浜益のニシン漁と密接な関係があるようだ．幕末から明治にかけ胆振・日高地方のアイヌの人々が浜益のニシン場で働いており，この人たちが胆振日高に帰って情報を広めたと考えられる．鈴木トミエ (鈴木，2007：48) によると明治 22(1889) 年の新聞記事に「川下村のニシン漁時の季節働者は 10 分の 6 青森地方，10 分の 3 は白老幌別地方のアイヌの人だった」とあるといい，近代になっても太平洋岸の人々密接な関係が保たれていたことがわかる．

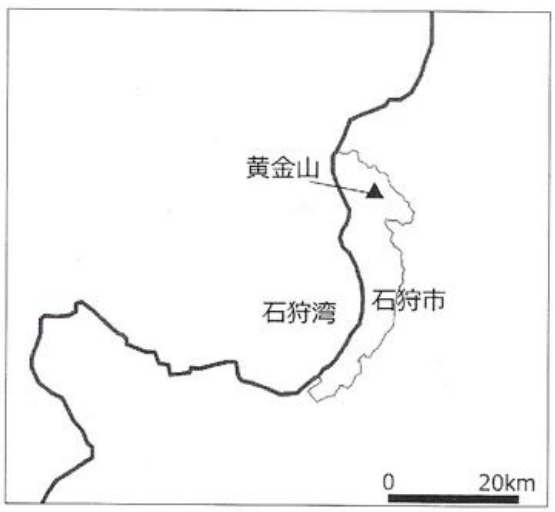

図 1．黄金山と浜益区の位置

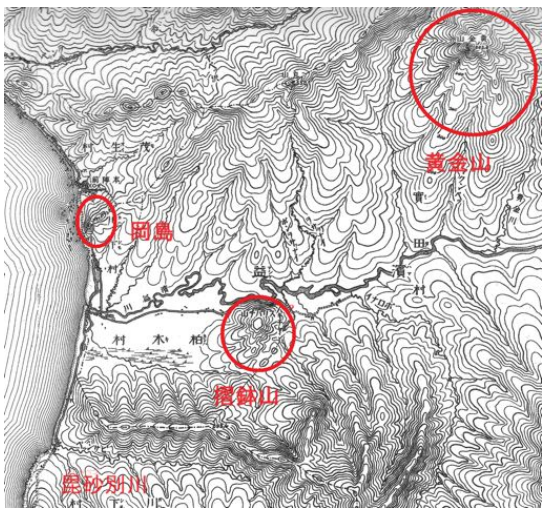

図 2．摺鉢山，岡島，毘砂別川等の位置 (北海道廳，1887 茂生に加筆)

図３．浜益平野からみた黄金山，丸山，摺鉢山 (高橋俊彦氏撮影)

図４．幕末に描かれた黄金山，丸山，摺鉢山 (蝦夷廻浦図絵・函館市中央図書館)

図５．東側からみた摺鉢山 (高橋俊彦氏撮影)

図６．海上からみた黄金山 (筆者撮影)

2. 日誌や絵図などに記載された「黄金山」「摺鉢山」

次に日誌や絵図などに残る「黄金山」の名称と変遷について述べる．年代的には江戸時代，明治を中心とする．また関連で「摺鉢山」も名称も含めた．

①　黄金山の最古の記録は 18 世紀末の松前藩士高橋壮志郎が書いた『蝦夷巡覧記』(寛政 9 (1798) 年) とみられる．この文献には「コカ子ヤマ」と表記され．古くから和名称があったことがうかがえる．この文献の記載は「ハママシケ　當所■運上屋有リ産物鯡海鼠鮑鱈カスへ鱒鮭魚油〆粕水悪シ當所ヨリヲフイ先子丑ニ當ル尤丑ノ方エ寄ル此所沢有リ　及部ノ沢位ナリ川幅八九間舩渡シ当所ニコカ子山ト云山有リヂャリ浜」となっている．なお文中「及部 (およべ) の沢」とあるが，これは浜益の川でなく松前の「及部川 (およべがわ)」のことだと思われる．(北海道立図書館所蔵資料閲覧)

②　黄金山の山容を具体的に描いた最古の記録は同じ寛政 9(1798) 年，近藤重蔵の「蝦夷地地図」(札幌市史, 1989) であろう．この図も「コカ子山」のカタカナ＋漢字表記で記録されている．

③　次はカタカナ＋漢字表記でなく漢字表記の「黄金山」及びアイヌ語名の最古例を示す．その文献は享和 9(1801) 年の磯谷則吉の『蝦夷道中記』で「此名黄金山ト云フアリ又タヨロシヘとて義経の古跡アリ」の記載がある．いうまでもなく「タヨロシヘ」はアイヌ語で黄金山のアイヌ語呼称の最古の記録とみられる．同時に源義経伝説が記録されており，ユーカラに類似した伝承がすでにあったことも窺える．義経伝説とユーカラの関係は不明であるが同時期に発生していた可能性もある．

④　次に文化年間になると黄金山の具体的な山容の記述がみられようになる．例えば田草川伝次郎の「西蝦夷地日記」には「小か年山　濱マシケにあり富士山に似たる形也さのみ高山にはなし能き山也」(文化元 1804 年) (中山編，1944：89).

⑤　次は文化 5 年の館野瑞賢の手紙 では「舎吏に当てコカ子山と言あり，沢辺に出て猊猪口皿を伏したる如くして衆峰に秀でたり，是又霊山」と書かれ，「霊峰冨士」にその姿を重ねたものと見られる．(高倉編，1982：479)

⑥　ここで文献に登場する黄金山の山容の代表例 3 例と異例 1 例を示す．図 7 ～ 8 は黄金山の山容の代表的なものを示した．図 9 を除き，いずれも西側 (海側) から見た姿である．図 7 は寛政 9(1797) 年に谷口青山が描いた『自高島至斜里／沿岸二十三図』(函館市中央図書館蔵) にある黄金山の姿．図 8 は荘内藩士が文久二 (1882) 年に同僚の旅行記から筆写した中にある「黄金山」の姿である (鶴岡市郷土資料館　原家資料 68)．図 9 は目賀田帯刀が安政 3 ～ 5 年の調査に基づいて描いた「延叙歴検真図」から明治 4 年に浄書した「北海道歴検図」「石狩州 (下)」(目賀田, 1871) にある黄金山の姿で山名は「小金山」とある．

⑦　図 10 は筆者の撮影で東側から北向きに撮影したもので山容はがらりと変わり，「マッターホルン」あるいは「ピラミッド」と形容する人もいる．

⑧　図 11 は明治 30 年に描かれた黄金山である．絵には「黄金山真景　在於北海道之濱益　丁酉夏六月　自學田信」と題名と作者名がある．黄金山の右端の山は「丸山」で作者は「自學田信」という画家であるが詳しい経歴は不明である．この人の絵は旧石狩市にも伝わっており，おそらくこの当時，ニシン場や土地の有力者を訪ね歩き絵を描

き生活をしていたものと見られる．この「黄金山真景」も浜益の大きなニシン場の経営者の家に所蔵されていたもので，画家にふるさとの山を描くようにとの希望があり描かれたと伝わっている．

⑨　摺鉢山については明治 26(1893) 年の「二十萬分ノ一北海道實測地図」(北海道廳編纂) が初出で当初の表記は「スリバチ山」である．河崎宏太郎によると明治半ばまで「丸山」とも呼ばれていたという．また摺鉢山のアイヌ語名の一つ「ベツサムシベ」は昭和になってから確認されている (河崎，1982)．なお，現在の「丸山」は図 3 に示したように黄金山と摺鉢山の間にある．なお摺鉢山のアイヌ語名「マチネタイルベシベ」の初出は昭和 16(1941) 年の名取武光の「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」である．

以上，11 例の摺鉢山を含む「黄金山」関する資料を紹介した．さらに前記 11 例も含むが表 1 に明治末までの黄金山の名称にに関する文献を参考まで示しておく．

図 7．コカ子山 (谷口青山，1798　函館市立中央図書館)

図 8．黄金山　文久 2 (鶴岡市郷土資料館原家資料 68)

図 9．小金山 (目賀田，1871)

図 10．東側から北を望む (筆者撮影)

図 11．黄金山真景　明治 30 年　自学田信画　石狩市はまます郷土館蔵 (撮影荒山千恵氏)

表１.

西暦	和暦	文献名	著者	名称等
1797	寛政9年	蝦夷地巡覧記	高橋壮志郎	コカ子山
1797	寛政9年	蝦夷地地図	近藤重蔵	山容図
1798	寛政10年	高島至斜里/沿岸二十三図	谷口青山,	コカ子山(其色黒)
1801	享和9年	蝦夷道中記	磯谷則吉	黄金山　タヨロウシヘ 義経伝説
1897	文化４年	蝦夷地図	今井寛治郎編	小金山
1897	文化４年	西蝦夷地日記	田草川伝次郎	小か年山　濵マシケにある富士山に似たる.
1898	文化5年	書　簡	館野瑞賢	コカ子山　猪口皿を伏す　霊山
1846	弘化3年	蝦夷日誌	松浦竹四郎	コガ子山　摺鉢を伏す，冨士の如し　黄金白金多く出し
1854	安政元年	蝦夷廻浦図絵	一瀬紀一郎/筆，白井金鳩/模写	函館市中央図書館
1857	安政4年	入北記	玉蟲左太夫	小金山　古来より登ル人ナシ
1857	安政4年	西蝦夷日誌	松浦武四郎	コカ子山(丸山)　タイルベシベ　コガネ山
1858	安政5年	蝦夷日誌	後藤蔵吉	コカ子山　金山穴
1858	安政5年	西蝦夷地濵マシケ略絵図	薮内於太郎	小金山
1859	安政6年	東西山川取調図	松浦武四郎	コカ子ヤマ　黄金山
1862	文久2年	庄内鶴ヶ岡より津軽領青森三厩へ出，箱館松前へ渡海蝦夷東地ヲシヤマンへより黒松内越西海岸ヲツスツ江出，夫より北地樺太迄明細絵図道中記　文久二年壬戌臘月写之	(原家資料68)	黄金山
1868	明治1年	官板実測日本地図　官板実測日本地図		コカ子山
1869	明治2年	北海道全図　開拓使版		コカ子山
1869	明治2年	北海道国郡全図	松浦武四郎	コカ子山
1870	明治3年	千島一覧　明治三年	泉谷市兵衛	コカ子山　道立図書館

西暦	和暦	文献名	著者	名称等
1871	明治4年	北海道歴検図「石狩州(下)」	目賀田帯刀	小金山
1873	明治6年	石狩国浜益郡地図	開拓使編輯課	黄金山
1874	明治７年？	日本地誌略巻４　石狩国	師範学校編集	黄金(ルビ：コカ子)・阿曽岩登諸山
1874	明治7年	日本地名字引	大槻修二編	八十黄金山　黄金登(コガネノボリ)
1875	明治８年	日本地誌略	富士越金之助編集	黄金山阿曽山
1875	明治８年	日本地誌畧字引(全)	永田方正編	黄金山(ルビ；ワウゴンザン)
1877	明治9年	日本地誌略字引		石狩国山名「黄金山(ルビ；コガネヤマ)　阿曽山」
1878	明治10年	日本地誌略字引巻４師範学校編輯　明治十年一月改正		黄金阿曽岩登
1879	明治11年	日本地誌略字引巻４	石川敬義編	黄金(ルビ；オウゴンコガネ)
1879	明治11年	日本地誌字引巻４	谷内総太郎	黄金山(ルビ；コカネヤマ
1880	明治12年	日本地誌字引巻４	永田方正	小金山(ルビ；コカネヤマ)子金山又　　黄金山(ルビ；コガネヤマ)
1881	明治13年	日本地誌略字引４	山口常太郎	黄金(ルビ：コガネ)―二子金二作
1885	明治17年	北海道志	開拓使編	黄金山浜益郡ニアリ
1886	明治18年	改正日本地誌略巻４	大槻修二	黄金幌群別
1893	明治26年	二十萬分ノ一北海道實測地圖	北海道廳編纂	黄金山　スリバチ山
1897	明治30年	黄金山真景	自學田信画	石狩市はまます郷土資料館蔵
1899	明治32年	日本名勝地誌第九編	松原岩五郎	黄金山・丸山(丸山初出)
1900	明治33年	浜益沿革史	増田良三	浜益村史所収　浜益冨士
1900	明治33年	北海道殖民状況報文石狩国	河野常吉	黄金山　浜益冨士　スリバチ山

3. 国定教科書と黄金山

今回の調査では「黄金山」が明治の尋常小学校用国定教科書の「日本地誌略」に掲載されていることがわかったので，そのことについて簡単述べておく. またこれに関連して「日本地誌要略」や「字引」という参考書にも「黄金山」などが掲載されている.

とくに明治 7(1874) 年発行の『日本地名字引』(大槻 1874：80) では「黄金登（コガネノホリ）」という山名がみられた．この山名は筆者にとっては初見で，少なくとも未確認の呼称だった．その後調査を進めると『日本地誌略』でも版により，「黄金登」とするものがあることが確認された.「登」は「のぼり」というルビが付されていることから，アイヌ語の「ヌプリ」＝「山」を起源としているとみられる.

この山名は現在ではほとんど確認できないが教科書に記載されていることから，今後さらに調査が必要だが，明治期にはこの呼称もあったのだろうと思われる．なお「黄金登」は「黄金 (和語)＋登 (のぼり・ヌプリ＝アイヌ語)」の複合名称とも考えられる.

ちなみに，厚田区の「阿蘇岩」も「阿曽登」と記載している版も存在する.

「日本地誌略」は筆者が確認できた範囲では明治 7(1874) 年から明治 19(1886) 年にかけて改訂しながら出版されたものと見られる．全 4 巻で全国の地理を学べる形になっている．通常は 4 巻目が「北海道・樺太・千島，琉球国」となっている.

教科書の内容はその地方の代表的な地形，町，河川，山，特産品などが掲載されている．前記したが，この教科書とは別に各巻に出てくる漢字の読み方を記したルビ付きの「字引」という本もみられ，これらの本をみることによって当時の呼称が確認できる.

しかし，「日本地誌略」の出版年代はちょうど北海道では開拓期にあたり，まだ教育所の設置も少なく北海道内でこの教科書がどの程度使用できたか筆者は十分把握できていない.『浜益村史』(石橋源昭和，1980：985) によると，明治 10 年当時すでに厚田区古潭では教育所が開設されており，この教科書が使用されていた記録がある．これは開拓使学務局員が指導巡回した際の復命書に「(厚田古潭の教育所) 生徒二七名，上等ハ日本地誌ヲ読ムト.」という記載と厚田区厚田村でも「上等ハ地誌略ヲ読メリ.」とあり，日本地誌や日本地誌略が使用されていたことがわかる．浜益区茂生の「浜益教育所」の開設は翌明治 11 年で，おそらく厚田村をならって『日本地誌略』なども使用されたとみられる.

ちなみ図 11 に明治 8 年版の「奥川富士越 (編集）　日本地誌略　北海道柯太州琉球国之部」(P 5.) に「石狩ノ圖」があるので紹介する.

この図は石狩川河口部の現石狩市本町地区のようすを描いたものである．上段の記載には「石狩川ハ五大大河ノ第一ニシテ，西ノ父川ト称ス」という石狩川の説明がある.

図は「石狩浜の第二砂丘から北～東方向，つまり石狩川越に現石狩市八幡を俯瞰するように描いたスケッチ」で遠くに浜益や増毛の山や岬もみえる．手前の山は当別村の阿蘇岩山と見られる．石狩川の右岸には若生の街並み，川に小さな舟が対岸を目指しているのは石狩川渡舟であろう．海には北前船が南に進んでいる．そして一番手前に石狩川と石狩本町地区の街並みがあり，三階建もある高い物見やぐらが設置されている．砂丘手前の細長い建物は「本陣 (旧石狩運上屋)」で物見やぐらは本陣の付属施設だと思われる．この時期の石狩市の河口部付近を描いた図は数少なく貴重である (図 12).

以上，『日本地誌略』について述べたが同時期のこの本に類似した『日本地誌略物産弁』という本もある．これも 4 巻目が「南海道・西海道・北海道」である．内容は日本各地の物産の紹介である．この本では石狩国物産は「〇鮭・鱒・海鼠・鰒・海藻　石狩川及ヒ浜益・厚田等　諸郡ノ河海

ニ産ス，中略．○海獣　浜益郡ニテ猟ス，海驢多シト云フ,」となっている．この本は恐らく今でいう「社会科副読本」のようなものと思われ，この本の第四巻目は明治 10 年初刻，再刻本は明治 13 年に出版されたという (桜井正信昭和 54 年日本産物誌 p 191).

すでに表 1 に今回の文献調査で把握できた黄金山・摺鉢山の山名変遷の一覧を示した．年代的には江戸時代から明治時代のものを示したが，この時期に限っても他に把握していない文献が多数あるものと思われる. この表をみると分かるように，江戸時代から明治前半期までは「コカ子山」「黄金山」「小金山」とばらつきがあるが，それ以降は「黄金山」の表記が定着するという傾向が把握できる.

また浜益では明治前半に区名に「黄金区」が採用され,「浜益富士」の地域名称もこの時期生まれている．このほか黄金山にちなむ名称は「小金川」「黄金村」「黄金平野」「黄金橋」などがあったようである．このような例では浜益川下の尋常小学校設置歎願書に [地方有名黄金山ノ称ヲ取リ黄金小学校ト称へ候様致度] (坂本，2010) という記述もみられる．また，前記のように明治初期には黄金山は国定教科書にも記載されるなど広く知られる山となり，郷土意識の醸成にも大きな影響を与えるふるさとの山になっていったともと見ることもできる.

4. 浜益アイヌと黄金山・摺鉢山

最後に黄金山・摺鉢山が浜益アイヌの人々にどのように認識されていたかが具体的にわかる「熊送りの祭壇」の図について述べる．この資料は金田一・杉山 (1942) の「石狩國濱益熊祭イナウ配列順序」，名取武光 (1974) の「　沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」で紹介されているものである.

すでに筆者は黄金山について，本来「チノミシリ」 のような存在であったのでないかと推定した．ここでは，浜益区出身の山下三五郎氏の「熊送りの祭壇の図」や同氏が情報を与えたとみられる名取武光の論文から読み取れる山の性格を考えてみよう. これらはいずれも昭和の記録であるが，山下氏が明治 15 年生まれ (大坂 2019) ということから大まかには明治から昭和にかけての浜益アイヌ文化に関する情報とみてよいだろう.

明治期のこの地域の関連情報としては，明治 22 年の永田方正の地名調査がある．この調査では札幌に居住していた琴似又市が同行しており，毘砂別川右岸側と上流にユーカラ関連の土地があると教えたと思われる.

又市は浜益の人ではないことから浜益以外でえた情報をもっていたものと思われる．なお永田の調査の際の資料は火災により消失したようで，その詳細は分かっていない (永田，1911).
また浜益村史を編纂した石橋源氏の調査によると，山下は大正 15 年までは浜益にいた記録があるという (石橋私信).

図 13 に山下の木彫り熊を示した．制作年は不明であるが，これは豊川重雄 (故人) が浜益で知人から譲りうけたもので後足底面に「三五郎」と彫られており，山下の作品であることがわかる. また，杉山寿栄男の「北海道石狩国浜益村岡島洞窟遺跡」(杉山，1938：348-360) によるとこの調査の際，山下に案内を頼んだことが記されており，浜益に向かう道中，山下がユーカラを聞かせてくれたとあり ，山下が浜益のユーカラの伝承者の一人だったことがわかる.

図 14 は山下三五郎氏が描いた「石狩國濱益熊祭イナウ配列順序」図及びその部分拡大である. これは昭和 17(1942：4) 年金田一京助・杉山壽恵男が出版した『アイヌ芸術木工編』に掲載されたものである．この図は浜益での「熊祭り (熊送り)」の際捧げられたイナウ (神) とその配置と捧げられた神の名前を解説したものである.

この図では中央の熊の頭骨の左側の③と示されたイナウが「ヒンネタヨルベ　マシネタヨルベ」で，その下に「上男　浜益黄金山」「下女　摺鉢山」と注記されており，黄金山と摺鉢山が儀式の際に祀られる存在であったことがわかる．

次は名取武光の「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」と題する論文を見てみよう．これは名取が昭和 16(1941) 年に北方文化研究報告に発表したもので，昭和 49 年に同氏の著作集Ⅱに補筆・再録されたものである (名取，1974：143-144)．この論文には正装した山下三五郎氏とヌササン (祭壇) の写真も掲載されている．撮影場所は書かれていないが写真説明には「浜益毛のヌササン (山下三五郎氏・北大博物館所蔵)」とあり，浜益毛＝現在の浜益で撮影されたと推定されるの山下三五郎の祭壇であると推定される (名取，1941・1974)．

この論文では前掲の「石狩国濱益熊祭イナウ配列順序」の場合より「ていねいに熊祭りをする場合」の例が記載されている．それによると，最大で 60 本くらいのイナウ (神) をたてるそうで，60 本のイナウのなかには「十黄金山 (ピンネタヨルシベ)」，「十一，マチネ山 (マチネタヨルベ)」ほかに「十二，山城の神 (チャシコットコロカムイ，ポイヤウンペのチャシ)」，「十三，山城から来る川 (オキランナイ)」，「十四，ポイヤウンペの戦場高地 (シンヌタップカ)」のイナウが祀られたという．この記載では，黄金山，摺鉢山 (マチネ山) とは別に「山城の神」が祀られていたことがわかる．山下三五郎が伝え聞いていたポイヤウンペのチャシは「黄金山」「摺鉢山」とは別の場所にあったことが窺えるなど，重要な情報が含まれている．この記載からみると「黄金山」「摺鉢山」はユーカラの主人公の「砦」ではなく別の価値をもった山だったと理解できよう．

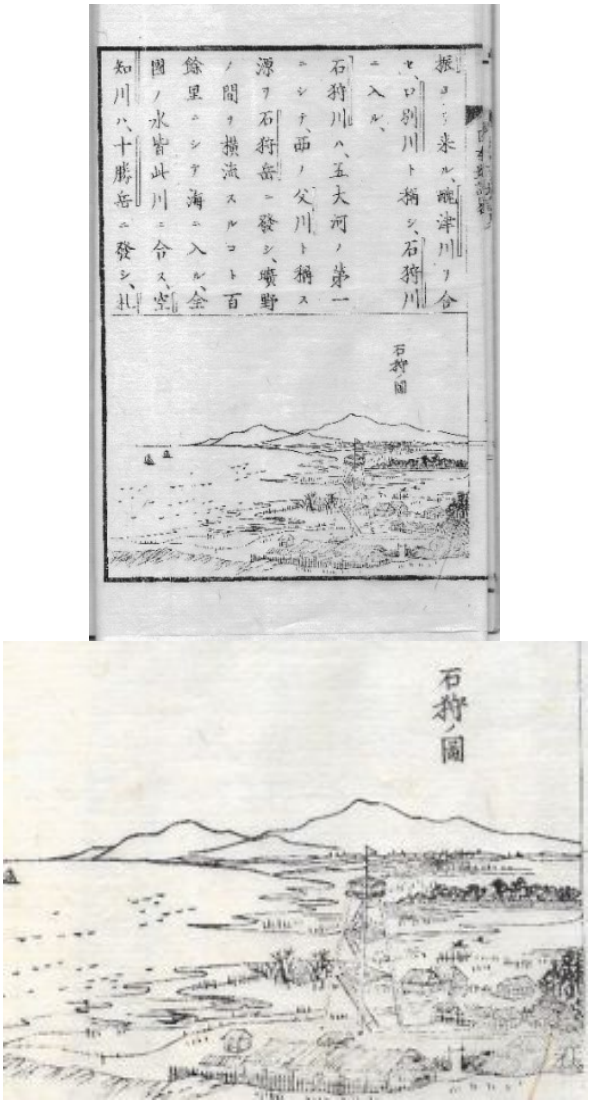

図 12．明治八年「官許　奥川富士越金之助　日本地誌略　北海道柯太州琉球国之部」　石狩ノ圖

図 13．山下三五郎の木彫り熊 (制作年不明　私設尚古社資料館蔵)

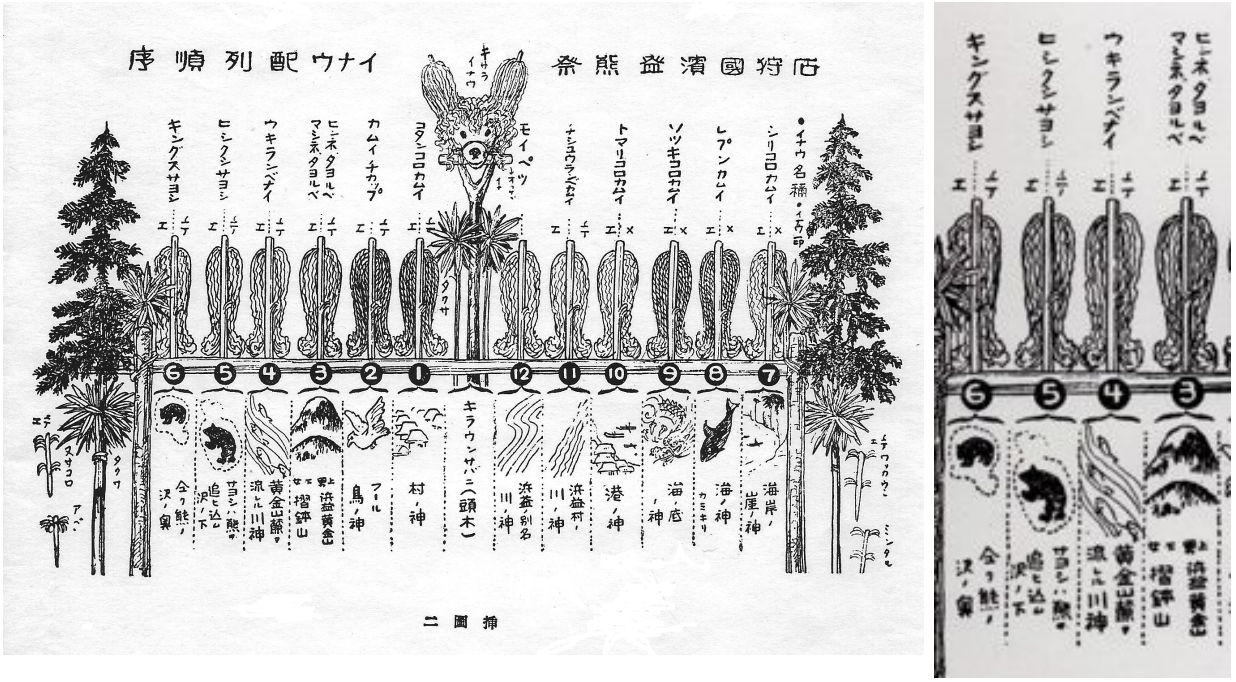

図 14.「石狩国濱益熊祭イナウ配列順序」と部分拡大　（アイヌ芸術木工編　金田一・杉山，1942）

謝辞：本報告を作成するにあたり，次の機関・個人からご協力をいただいたのでお名前を記して感謝申し上げる．国立国会図書館，国土地理院，鶴岡市郷土資料館，北海道大学図書館，早稲田大学図書館デジタルアーカイブ，函館市立中央図書館，私設尚古社資料館，石狩市教育員会，工藤義衛，荒山千恵．

引用文献

富士越金之助編輯，1875. 北海道柯太州琉球國之部日本地誌略．五書房発行.

富士越金之助，1876．官許　奥川富士越金之助　日本地誌略　北海道柯太州琉球国之部：5.

月刊文化財，2009．名勝の指定　ピリカノカ．第一法規株式会社：15.

原家資料 68，1862．庄内鶴ヶ岡より津軽領青森三厩へ出，箱館松前へ渡海蝦夷東地ヲシヤマンへより黒松内越西海岸ヲツスツ江出，夫より北地樺太迄明細絵図道中記　文久二年壬戌臘月写之．鶴岡市郷土資料館蔵.

北海道廳，1887．假製五万分一圖　増毛第十一號　茂生　令和 5 年．国土地理院道.

一瀬紀一郎 / 筆・白井金鳩 / 模写，1854．　蝦夷廻浦図絵．市立函館中央図書館蔵.

石橋源．1980．浜益村史．北海道浜益村：295，485.

石川敬義編，1879．日本地誌略字引巻四．武藤出版時習堂.

磯谷則吉, 1801．蝦夷道中記．北海道大学附属図書館.

自学田信，　1897．黄金山真景．浜益郷土資料館.

開拓使編，1885．北海道志．北海道大学図書館蔵.

河崎宏太郎，1982．ユーカラのふるさと．私家.

河崎宏太郎，1986．先住民族の文化遺産『ユーカラ』への慕情．私家版.

金田一京助・杉山壽恵男，1942．石狩國濱益熊祭イナウ配列順序，アイヌ芸術木工編：4.

久保寺逸彦，1970．ユーカラ．アイヌ民族誌下 (アイヌ文化保存対策協議会編)，第一法規.

松原岩五郎，1897．日本名勝第九編 (北海道の部)．東京博文館：96.

松浦武四郎・吉田常吉 (編), 1994．新版蝦夷日誌 (下)，西蝦夷日誌 第五編.

松浦武四郎，1859．東西蝦夷山川取調図．北海道立図書館.

目賀田帯刀，1871．北海道歴検図「石狩州 (下)」．北海道大学北方資料室.

文部省，1874 ?．日本地誌略巻 4．師範学校編輯：8

永田方正，1911．オシンタ旅行記．人類学雑誌第貳拾七巻第壱號.

永田方正編，1875．日本地誌畧字引全 (巻 3).
中山利國編，1944．西蝦夷地日誌．求龍堂：89.
名取武光，1941．沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ．北方文化研究報告第四輯.
名取武光，1974．沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ (補筆判)．アイヌと考古学 (二) 名取武光著作集Ⅱ：143-144.
名取武光，1985．アイヌの花矢と有翼酒箸．六興出版 アイヌの花矢　胆振・日高地方，p40 補注.
NHK 北海道本部編，1975．北海道地名誌．北海道教育評論社.
岡谷義一，1877．岡谷義一編輯改正日本地誌略字引 北海道　柯太州　琉球國之部．東京書林，星野松蔵版　明治九年一月七日新刊：5.
大坂　拓，2019．浜益地域のアイヌ民具資料に関する基礎的検討―1930 年代の研究．動向と工芸家山下三五郎の活動―北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 (4).
大槻修二，1874．日本地名字引 森屋治兵衛：80.
大槻修二編, 1876. 日本地誌要略　巻三　北陸　北海.
大槻修二著・永田方正解, 1880. 改正日本地誌要略字引.
大槻修二，1886．改正日本地誌略　巻 4 .
坂本紀子，2010．1895 年に施行された北海道における小学校の教育制度の特徴．北海道大学紀要 (教育科学編)：61(1)
桜井正信，1979．日本産物誌　生活の古典双書 21．八坂書房：191.
師範学校編輯，1878．日本地誌略巻之四．文部省.
札幌市教育員会編，1989．新札幌市史　第 1 巻　通史 1 ．札幌市.
杉山壽恵男，1938．北海道石狩國濱益村岡島洞窟遺跡　．東京人類学会：648-360.
鈴木トミエ，2007．新聞に見る石狩・厚田・浜益歴史年表明治 21 年～明治 25 年：48.
高橋壮志，1798．蝦夷巡覧記．北海道立図書館 (マイクロ参照).
高倉新一郎編，1982．16 館野瑞元　宗谷よりの書状二通　犀川会資料　全．北海道図書出版企画センター：479.
玉蟲左太夫，稲葉一郎 (解読)，1992(1857)．入北記―蝦夷地・樺太巡検日誌.
谷口青山，1798．自高島至斜里／沿岸二十三図．函館市中央図書館.
谷壮太郎，1879．日本略字引 4 ．山静堂.
宇田川洋，2006．増補アイヌ考古学．北海新書：82-84.
山田祥子，2008．【研究ノート】ウイルタ語口頭文芸の伝聞形式 ―サハリンにおける言語接触の可能性―．北海道民族学 (4).
山口常太郎, 1881．日本地誌略字引巻 4 ．出版時習堂.
薮内於太郎，1858．西蝦夷地濱マシケ略絵図．北海道大学北方資料室 (北大 372).
吉田寿人，1971．浜益の荘内藩陣屋跡．北海道の文化 20.